

雪女はどこから来たか

大澤 隆 幸

- 1 草稿の検討 2 幻想の基調 3 作品のコンテクスト 4 山中他界観
5 日本人の一特性 6 激昂する女 7 生きなおしたいという願い

ハーンは『怪談』序で、「雪女」に取りかかるきっかけを「武蔵国西多摩郡調布のある農民が、生まれ故郷の村の伝説として私に語ってくれたもの」と記した。序は作品の一部であるので、フィクションの可能性がないとは言えない。しかし、ハーンに三男の清が生まれて、1900年9月頃「府下調布在の農家の娘」お花（一雄189）が子守として来て、また「大久保に普請をするに当り」（同190）お花の父宗八が雇われた（大久保への転居は1902年3月）。このような経緯や『八雲』第14号の小泉時氏の論考「青梅と雪女」から見て、宗八がハーンに原話を語った可能性はあるだろう。チェンバレン宛の手紙や「幽霊と化け物 Of Ghosts and Goblins」から、彼には雪女について松江時代から相当の知識があったことが知られる。そこに大久保転居後に刺激が加わり、「雪女」が成立したのではないかと筆者は推測する。本稿は、この作品がハーンが日本文化と対話して生まれたものであることを論じる。

1 草稿の検討

ハーンが宗八から聞いた話が一役買って結晶したと思える草稿を検討する。草稿にはいくつかの段階があるだろう。そのうち、「バレット文庫」にある「雪女」草稿を¹⁾見ると、言われているように次の点が目につく。

- ①少年の名が挙げられない。作者は名を付けることで、個人として輪郭を与え、この

1) へるん 36.110 以下

個人を具体的状況に置いてそれに反応させることができる。少年の名を出さないことは、この草稿がごく初期のものだからであろう。

②凍死した仲間が老人ではなさそうである。His companion, the manという表現は、文脈からして少年よりも年上である感じはなく、ほぼ同年齢ではないかと思わせる。最終稿（作品として発表されているものをこう呼ぶ）では老いた樵の茂作と18歳の見習いの若者を組み合わせる。老いに至り、人生のたそがれを迎えてもさほど不自然でない老人は凍死し、若者はどうにか回復する。このことで雪女の恐ろしさ・凶暴さは、若者の一人が死ぬ場合に比べて緩和されていると指摘できる²⁾ので、草稿の雪女は魔的で凶暴である。

③少年には父母がいるようだ。雪女は、自分と出会ったことを誰にも話すな、「たとえ母でも父でも」と言い含めているからである。これが最終稿で母親だけに変えられ、最後に子から去っていく母という設定によって、読者の意識では母子の結びつきが強く浮かび上がる。巳の吉とその母、巳の吉とお雪、お雪とその子らとの結びつきにおいて、二度も母子のつながりを取り上げて基本関係としていることは作者の特別な意図を想定できるだろう。

④滑稽さ。草稿では二人の若者を襲った雪女はのっぼの姿になって消えてゆく。このような滑稽な面はもともとの雪女伝説にあったものである（参照『日本警見記』の「お化けと化物」）。このことも草稿が早い段階のものであることを示唆する。滑稽な要素が消えたのは、静かでありながらも激しい面を持つという、対立した緊張関係の作品基調には調和しないと考えられたのであろう。

⑤草稿では女は少年にand whispered very distinctly. “I intended to kill you:but, seeing you asleep, I could not help feeling sorry for you.と「はっきりdistinctly」ささやく。「ささやく」と「はっきり」では意味上なじまないわけではないが、最終ではなくなる。これがあると現実であることが強調されることに通じ、夢の感じは消える。

sorry がpityに変えられ、単語が調整されている。英語本来の会話的で軽い感じのsorryを、「信心深い」が原義の重みのある、硬いニュアンスを持つラテン語系のpityにしている。このニュアンスは雪女の高圧的に威嚇する態度に調和する。つまり、女は少年を上から見下ろし、心理的に相手を支配し、意のままにするのである³⁾。

女は少年の上にかがみこみ、上から見下ろす位置関係をとっている。「彼の上に屈

2) へるん 19.16、「八雲」11.9

雪女はどこから来たか

みながら bending over him (草稿第二葉)、しかし彼女の吐く息は、彼女が彼の顔の上にならしたので身を切るような冷たさだった But her breath was piercingly cold, as she was above his face (第二、三葉)。彼女は微笑みながら、彼の上に屈んでいっそう近くなった She bent closer above him, smiling, …」雪女が巳の吉を上から見下ろす位置関係のモチーフが最後まで残っているだけでなく、他の作品でも繰り返して取り上げられている³⁾のは、重要なモチーフであることを示す。

以下は後に草稿に作者が加えた要素である。

①村の人々はお雪を不思議がる。お雪はたいていの百姓女のように老け込むことがない。「土地の百姓たちは、お雪が自分たちとは生まれが違っていると考える。お雪は大勢の子供を生んでもその容姿は初めてこの村へ来た時と同じように若くて、みずみずしい。」自分たちとは違う存在だと思ふにとどまらず、不思議な感じを抱えていることが分かる。このことから、村人とお雪との交渉が乏しいものであろう推測できる。お雪は表面的には受け入れられてはいたが、彼女はこの村社会で孤独であったと考えざるをえない。巳の吉も、妻を村人のように「不思議な人だ、自分たちとは生ま

3) ハーン作品で pity がどのような文脈で使われているかを見るために、若干取り上げる。「鯨人の恩返し」(『影』)では、追放されさまよっている鯨人が憐れみを請う。「どうか、この私をあわれと思し召されるなら、宿る所を見つけ、何か食べ物をお恵みくださいませ! If you can feel any pity for me, do, I beseech you, help me to find a shelter, and let me have something to eat!」という風に美女に憧れる俵屋藤太郎に頼む。

「青柳の話」では、友忠が吹雪の夜に山中で行き悩みの挙句やっと救いの小屋を見つける。その彼を迎える場面。「老婆が外戸を開けた An old woman opened them(i.e. storm-doors), そして見知らぬ美貌の若侍が難儀している様を見て、いたわりの気持ちで声をあげた and cried out compassionately at the sight of the handsome stranger: 「まあまあお気の毒なこと Ah, how pitiful! —こんな吹雪にお若い方が一人旅をなさろうとは a young gentleman traveling alone in such weather! お侍さま、さあ、どうぞ中へおはいりくださいませ Deign, young master, to enter.」この pity は痛ましい思いを感じた老婆の言葉であるが、若い男に救いの手を差し伸べられる。

「葬られた秘密」では、「おそのは大変賢く、また可愛いかったので As she was very clever and pretty 父は田舎の先生が教える程度の教育では可哀想だと思った。he thought it would be a pity to let her grow up with only such teaching as the country-teachers could give her」

「食人鬼」では「お坊様、Know, reverend Sir, 私は人の肉を食う食人鬼なのです—that I am a jikininki, —an eater of human flesh. どうか私を憐れと思し召せ Have pity upon me, 一体どうしてこうした様に落ちたのか、そのひた隠ししてまいった罪を申す上げ、懺悔するのをお許しくださいませ and suffer me to confess the secret fault by which I became reduced to this condition」

「漂流」では、助けられた天野甚助に帆船の船長の爺さんは「私どもの船が沈んだことや、私が海につかっていた時間のことを聞いて、たいそう気の毒がりました he expressed great pity for me」。救助した船長と救われた甚助の心理関係がこれで表現されている。

れも違う wonderful person, by nature different」と思わないのか。通常感覚からすると、彼はそういう思いを抱いていたと考えたくなる。しかしそれを取り上げると二人の間に不調和を認めることとなり、リアリズムの手法にならざるをえず、以下で取り上げる幻想性を希薄にするであろう。

②お雪との出会いと結びつき、子供に恵まれた幸福な家庭生活が加えられた。最終稿

4) 眠っている子供を母親が上から見つめるという光景は、ハーンにとって母子の愛情に満ちあふれた至福のイメージであつたらしい。ハーンが母を思うとき、いかにこのような固定観念に捉われていたかは、在米時の作品でも実生活でも出てくることで分かる。

「バンジョー・ジムの物語」(1876/10/1)では、「その子を罰すると死んだ子のお母さんが必ず夜な夜なあらわれて罰した人につきまとう・・・マギー婆さんは実際その影の女が、ある夜、寝ている子供の上に身をかがめキスをしている様を見た。」

「黄金の泉」(1880/10/15)では、「目が覚めてみると、ひとりの女が上から屈みこむようにして、自分のことをのぞきこんでいた」が、その男は、「ちょうど赤ん坊が母親の腕のなかで眠るように、まもなく自分はそこへ正体もなく眠りこんでしまった」のであった。

タイムズ・デモクラット紙夕刊(1881/3/12)に掲載された(ユー32)ボードレールの翻訳「月の贈り物」にはこのような情景があり、そしてまた、「春の妄想」(1881/4/21)では、ボードレール(作品名は上げられていない)が赤子に囁く月という形で変形して描かれていることを取り上げている(雪女が巳の吉を襲うあの場面にはこの「月の贈り物」が投影しているという。参照牧野230)。

「ジプシーの話」(1881/8/18)でははっきりとそれが母親であるとしている。「色の浅黒い、気の強そうな、痩せがたちの顔でね、新月のように輝いていて、目が特に大きくて、しかも流れだすような黒い目で、それが眠っているおれの上へ屈みこんでね(中略)この顔が夢にも現れるようになってきた。懐かしいなかに烈しさのあるその目に、夜にぞきこまれると、おれはよく目が覚めて、それから星空の下へ出ていって、すすり泣いたもんだ。」

『中国怪談集』の「織女の話」(1887)では、夢の中で「見知らぬ一人の女が自分のそばに立って、上からのぞきこむように身を屈め、形のいい細い手のすんなりとした指の先で額に触ってくれるのである。」

「チータ」(1888)第三部・1では「ママは決してすっかり消え去ってしまったわけではない。それというのはママの優しい姿が夜、夢の中に現れて、身を屈めて自分に微笑みかけ、自分を愛撫し、自分に話しかけてくれるからである。」

「ユーマ」(1890)第十章では、寝つけないユーマの夢が描かれる。「だがしばらくすると、ユーマの頭は自分の名前を呼ぶ声を聞くような気がしてまたさめた。その声はかすかにたいへん遠くから聞こえてきた。昔に見た夢を夢の中でまた思い出しているようなそんな感じの声であった。それからユーマはある顔に気がついた。美しい褐色の女の顔が、黒いおだやかな目で、自分を見おろしている。黄色いマドラスの木綿更紗のターバンを頭に巻いている下で、その両の目は微笑んでいる。どこからともなくさしてくる光に照らされた顔である—それはもうずっと昔の朝の記憶であった。すると薄闇を通してそのまわりに穏やかな青い光が大きくなった—朝の光が霊のようにさしている。ユーマにはそれが誰の顔か分かった。ユーマはそれに向かって『優しいお母さん』とささやいた。」異母妹ミニー・アトキンソン宛(1892年前半頃と推定。へるん26.101)では、

My mother's face only I remember—and I remember it for this reason. One day it bent over me caressingly. It was delicate and dark, with large black eyes—very large. A childish impulse came to me to slap it. I slapped it, —simply to see the result perhaps. と書き記して、ハーンは自分の体験したことであると思いつこんでいた。これは彼が作品に自己を投影していたことを示している。

こうして見ると、ハーンの意識には子を見下ろす母親のモチーフが原体験としてあって、彼にはかけがえのない充実した至福の瞬間を意味し、子と母の結びつきを本質的に表す根源のヴィジョンであった。

雪女はどこから来たか

では、巳の吉の母は、お雪が嫁に来て五年ほどして没している。その役割はお雪を嫁に迎え入れ、嫁としてのお雪を讃えることだけにある。お雪は嫁として美化され、夫巳の吉との関係でも妻として美化され、子を持つ母親としても美化されている。女としてお雪は完全に理想化され、人間としての欠点や汚れを感じさせない、現実ばなれした姿で作者は描いた。

③雪と巳の吉が直接に向き合い、二人は穏やかな安らぎの空間にいる。子供たちが眠り幸福な雰囲気にあふれた家庭がうかがえる。草稿にはなかったこのような設定は、作品全体の基底にハーンが加えた重要な要素である。

2 幻想の基調

「私がこれから語る時代にはat the time of which I am speaking」(『怪談』序)で分かるように、テキストは作者設定の語り手の「私 I」が語り始めるが、巳の吉とお雪が親しくなる場面では諺を持ち出して、二人の結びつきの経過を一気に表現している。その他の場面ではこのIを察知できず、語り手の介入の気配は消される。

巳の吉が吹雪の中で恐怖を体験する場面は、巳の吉が三人称で扱われていることから分かるように、語り手が語っているものの、巳の吉と語り手の距離が非常に近く、ほとんど一体である。それは、雪女が巳の吉の上にかがみ込み、彼と対峙している場面で効果的で、巳の吉の内面に語り手が入り込んで語ったようであり、それだけに読者に強烈に迫る。

例えば「彼は叫ぼうとしたが、声が出せないのに気づいた He tried to cry out, but found that he could not utter any sound」。巳の吉を内面から取り上げる。彼は目に見えない力でがんじがらめになり、金縛りにあって身動きできず、意志を奪われている。

「見ると、その女は、たいへんに美しい。—その眼がこちらをぞっとさせるほど恐ろしかったけれども。」この訳文でははっきりしないが、原文は「彼に恐ろしい思いをさせたけれども though her eyes made him afraid」である。巳の吉が恐ろしい思いをしたことは言葉にはならず、当人しか知らないはずである。それは、あくまで巳の吉の内面の出来事であり、彼一人の主観的に体験された夢であるかのごとくで—夢なのか現実なのか不鮮明になる。巳の吉が目覚めた意識のままで、不思議と恐怖のうちに、お雪が煙のように消え去ってゆくと描かれるのも、夢の論理の応用である。

ここでは登場人物と語り手がほぼ重なり合い、このように、視点を事件当事者に設定して、そこから語ることで迫真性を増す。当事者の主観の世界で行われるので、事の真実性は保証されず、夢幻的な効果を出せる。現実性を明らかにする「はっきりと」が消されたのも同じ狙いであろう。読者は現実かそうでないのかを決められない状況下に置かれ、宙吊りにされる。

巳の吉が自分の体験を語るクライマックス部分は直接話法の描写になり、会話部分に比べてずっと少ない地の文の描写は劇のト書きに近づく。読者は語り手が介在しない緊張の場に立ち会う。登場人物の心理はしぐさ、身振りで間接的に表現され、読者は巳の吉、お雪の内面を外からは窺えない。これは、それまでの内面描写から、描く尽くさないことによって余韻を出す手法⁵⁾とも見え、またキプリング等において評価していた劇的対話手法の採用ともみなせよう⁶⁾。

3 作品のコンテキスト

「雪女」に見られる要素、モチーフを短編集『怪談』の他の作品で点検してみると、作品それぞれが共通するモチーフで互いに繋ぎあわせられ、強調されて浮かび上がるという面を指摘できる⁷⁾。

5) 作者は描き尽くさないことに美的価値があると考えた。「茶碗の中」(『骨董』所収)で用いられた鮮烈なイメージ、「まっくらな闇の中を螺旋状に続いている、古い塔の階段を登って行き、その闇の真ん中で、いつの間にか蜘蛛の巣だらけのどん詰まりに来てしまい、ぱったり階段がなくなっている」「断崖を切り開いた海沿いの道をたどっているうちに、ひょっと角を曲がると、そこはもうごっこつした岩だらけの絶壁になっている」は、事の進展の結果の突然の断絶という強い記憶を残す手法として、作者の詩学の一面ではないかと筆者は考える。ヘンドリック宛(1893/6/30)で「By saying half-a-thing one can produce more effect than by saying, or rather trying to say, all」(Stevenson 277)と書いたのはそれを証する。「樹木の詩」では「急に終わらせることは、じつは創作上から意図されたものである。こうすれば想像力に余地を残し、心を憂鬱な気分にしたらせておける。暗示をするだけで感情をかきたて、そのままにしておく。」と述べている(著作集13.289)。

6) 著作集12.293以下。英文学史Ⅱ XI ヴィクトリア時代の小説。

7) 「むじな」では、見知らぬ女に話しかけ、助けの手を伸べる優しい商人。「おしどり」は夫婦の固い結びつきが破壊された場合。「お貞の話」では、再生して結合を果たす喜びとそこに至る純愛。「力バカ」は、不幸な生まれの子が再生してより良い家柄に生まれるのを願う親心。「安芸の介の夢」では、幸福な結婚生活とその後の子らの不安のない養育。「うばざくら」は、実の母のように身代わりになる愛情あふれた乳母。「かけひき」「鏡と鐘」「お貞の話」「十六桜」は、いまわの際の祈願・怨念。「食人鬼」は、私欲の妄執のため、他界して食人鬼に生まれ成仏できない存在。「ろくろ首」は、亡霊の祟りを見事に処する話。「ひまわり」では、人のために自分の命を捨てるという最高の愛の話。

雪女はどこから来たか

『怪談』冒頭の「耳なし芳一」は、芸術によって現実世界と幽界の間を取り持つ芸術家で、この作品が『怪談』冒頭に掲げられたのは、作者がこの短編集に盛ろうとした再話する芸術家の精神を歌っている作品であり⁸⁾、「ひまわり」が最後に置かれているのは、ハーンが最高の価値として生きたいと何度も記した、人のために命を捨てるというメッセージを掲げているからと解することもできよう。

「雪女」は「葬られた秘密」と「青柳の話」の間に置かれている。前者では、死後も気にかかることのために安らかにあの世に旅立ちできない経緯が取り上げられる（これは「雪女」でも雪女出現の理由として潜在的にはめこまれているモチーフであることは後述する）。「青柳の話」は、異類と結合した結果、幸福な暮らしとその持続不可能を描いているので、「雪女」と比較対照に値する。寡婦の母を持つ「人をひきつけ、姿形もよい」二十歳の若者が雪山で異類一家の「美しい」（何度も繰り返される）娘を見つけ、魅せられる。結びついた二人は幸福に暮らす。しかし、ある日突然一死が青柳を襲う。突然に霧のように消えるお雪にたいし、青柳も自分が人間でないことを打ち明けて、その亡骸ともども去ってゆく。これは雪女を樹木の精に変えての男女の結びつきのバリエーションではなかろうか。

破局の訪れるきっかけは違っている。しかし、自分は人間ではないという以下の今わの際の打ち明けの言葉は、お雪が巳の吉に言ってもおかしくはないと筆者には思える。

「わたくしどもが結ばれましたのは、きっと前世のちぎりゆえでございましょうね。あなた。それに、この楽しいちぎりは、きっと、何度生まれ変わりましたが、わたくしたちをいっしょにしてくださいませわね。でも、この世のご縁はもうこれかぎり。お願い、わたくしのために念仏をと覚えて—ああ、わたくしは息が絶えます」「今はもうあなたに、まことをかくしだてするまでもございませぬ。実は、私は人間ではございませぬ。木の魂が私の魂、木の心が私の心・・・」ここには、前世の契り、この世での幸せ、去ってゆく必然、異類の告白がある。

4 山中他界観

1902年11月頃、ハーンにE・ビスランドを通してコーネル大学より招聘の話があり、日本に関する連続講義を行うことになった。これが『日本——一つの解明』につながり、

8) 国文学 132

翌年7月上旬に一応完成し、翌々年3月校正刷りが出る。「雪女」の執筆はこの『日本』取り組みの時期に当たるので、両者の関連は考えられる。

ハーンは日本文化の基層にある、仏教渡来以前における死者と生者の関係について、松江滞在期の旅を描いた「日本海に沿って」と東京時代の「海辺にて」で関心を示し、『日本』でも扱った。それを要約すると、生きているものの世界は、すべての人間の霊が死んで行く黄泉の国に支配されていた。古神道では、死者は天地の支配者になり、自然界における一切の出来事の原因であったとする。亡霊に恐怖をいただき、亡霊の怒りを恐れる暗い時代があった。亡霊は葬られた塚からいつでも出てきてこの世と交渉をもつ。生前住んでいたところを訪れたり、生きている者の夢に現れる。生きている者は生きている間常に亡霊の監視下にある。

亡霊は死によって神秘的な力、超自然の力を得て一種の神になった。神にはなるが、生きている間に著しかった性質は、依然としてそのまま持っている。人々は初めの原始的な段階では死者の不機嫌を恐れていた。

人々は、死者を死んでから後も一家の生活の一部になっていると考えた。死者は、生前愛した人たちの中に、なおも存在しているものと信じられた。姿は見えないけれども、死者は一家を守り、一家の人たちの繁栄を見守り、毎夜、灯明の光の中にふわふわと現れてくる。死者は自分の死後の幸福については、生きている人々に頼る。死者は自分の子供や身内の者の愛情を求めると人々は考えた。死者の幸福は、生きている者がささげる尊敬的な奉仕による。死者を粗末にするのは残酷であり、死者の幸福は生きている者のつとめ次第である。彼らは慰めを必要とし、また、何かの方法で、生きている者の喜びと苦しみを分かち合うことができる。生きている者の幸福は、死

9) 「さまよえる亡者たち」1875/8/29「奇妙な体験」1875/9/26。「バンジョー・ジム」1876/10/1のように、死んだ者がこの世に戻ってくるということもハーンには重要な関心だった。「絞首刑」1876/8/26では、処刑される若者は、幼い頃に亡くなっていた母が夜の暗闇の中で泣き叫ぶ声を聞く。「貧しい暮らしのスケッチ」1877/1/7で、72歳の老婦人が子供の頃亡くなった母を突然思い出すことに記事の筆者は感動する。『アメリカ雑録』(1924)の「死せる妻」は翻案だが、死者はその最後には夢の中でやってくることを予告する。

クレービール宛の手紙(1882/4/30以後)でも「小説における超自然的なもの」でも「カレワラ」の「金の花嫁」「銀の許婚」を取り上げ、死んだ母がこの世に戻ってくることを取り上げている。『中国怪談集』1887の「孟沂のはなし」「顔真卿の帰還」も同じ。

ロングフェローがノルウェー語から訳した「The Musician's Tale」からの「The Mother's Ghost 母親幽霊」を松江中学校や一雄への教育に使っている。これは死んだ母が残された子供らが気がかりで冥界の主から許可を得て戻ってきて子らの世話をする。

日本時代では、『日本警見記』1894の「お化けと化け物」での7「位牌の話」は「おとぎの国の妖怪たち」(現代教養文庫1996)では文字通り「帰って来た死者」と訳されている。

雪女はどこから来たか

者に対して、忠実にその義務を果たすことにかかっている。だから死者と生者とは、相互の助け合いをしている。これは愛情の宗教であり、この信仰は今日に至るまで残っている。このような趣旨である。

そして亡くなった者がこの世にまた帰ってくることについてはすでに在米時代から作品⁹⁾で取り上げられていることから分かるように、ハーンの関心の不変定数であった。

「雪女」の冒頭で、樵の茂作と巳の吉を雪世界に留まらせる川が出る。指摘されているように、川を渡ることは神話では他界への移行を意味し、「山から流れ出る川は山中他界への入り口」¹⁰⁾である。帰りに渡し守がいなくて彼らが戻れないということは、他界の存在になったか、あるいはなっても同然ということである。事実、茂作はこの世を去った。渡し守は彼ら二人を連れ帰ることを忘れたのではなく、他界に入り込んだので連れ帰る必要がなかったのである。以後川に関する言及が全くないことは、不思議体験を可能にするためだけであることを示す。これによって他界と人間界が結合される。

読者は巳の吉らが作品では水平に移動していると思うかもしれない。樵であるから、当然、山に登っている。彼らが出かけていった先は、人々が暮らす生活空間から離れた山中である。里から離れ、里を見下ろせる地点である。里を見下ろすところとは、人里離れた闇の世界であり、生きた人間の支配外のところと旧日本人は考えた。ハーン自身もすでにヘンドリック宛（1893.11.18推定）で「山々はかつては神々の住処であり、また崇拜ないし葬礼の最も古い場所であった mountains have ever been the abode of gods, and the earliest places of worship and of burial.」と山中他界観につながる認識を述べている。

ハーンのそういう認識は、後の学者らにも否定されてはいない。わが国では死者の靈魂が山上の靈地におもむくという考えは広まっていた¹¹⁾。「山神の靈威に満ちた」「山

10) 赤田30。ムラの内と外の区別は、以前は人々になんとなく意識されていた。定住している地域とは別のところがあって、そこには境界があり、それは特に川が強く意識させた（参照。焼津市南部土地画整理組合「ヤシャンボー」66。平成5年）。また二つの空間の境界を通過するとき人々は独特な気分を味わったという（静岡県史民俗調査報告書「浅間神社界限の民俗」3および23以下。宮田76）。このような境界意識に敏感な時代には、川は人々に「あの世とこの世の境目」として考えられ、靈の出現地や、より死の国に近いところとみなされ信じられていた。さらに赤田16を参照。

11) 大林190

12) 久野78

それ自体が葬地として他界¹²⁾であり、「古代の日本では墳墓は山上や山坂など、山地に営まれるのが普通¹³⁾」である。霊的なものが深山に潜んでいるかもしれないと想像され、山を経て霊的なものが人里に來臨する、あるいは山を経て他界に向かうという考え方があり¹⁴⁾、この中継地が他界と混同されて¹⁵⁾意識されもした。

旧日本人の意識では、運悪く非業の最期をとげたとか、若死や独身での死、また祭や供養をしてくれる子孫を持たない者の霊は、祖霊体系の外に取り残され、一まとめにして邪霊・悪霊と呼ばれるようになった¹⁶⁾。それらはかつて生きていたところへ無縁の仏になって帰ってくる¹⁷⁾。鎮められていない霊、死を完了していない霊、死者として死後どこへ行ったらいいか分からない霊、死者の執念を抱いたものは、霊として心残りなく現世から出て行くことができない。死者として祀られず、供養されないで救済されず、死者として帰るべきところのない無縁仏となりさまよう。無縁仏とは、家が軸である旧日本社会でそこに受け入れられなかったか、そことつながりを失った傍系の存在、そして夭折した存在である。雪女が死者の別の姿であると見ることができるのは、その白装束による。白装束は花嫁の白無垢で一般的であるが、元々は里方の家にとって娘が死ぬことを意味し¹⁸⁾、あの世への帰属を象徴している。

旧日本社会での一家は男に支配され、実家でも妻となって他家に嫁いでも女は男に抑えつけられ、頭が上がらない。そういう日本の女性でありそうなのは、離婚、(ハーン「和解」の男女のように) 男の身勝手な一方的離婚であろう。「長い間、殊に武士の家庭では、男女間のことでは、感情よりも義理を重んずることを躰られて」¹⁹⁾ きて

13) 久野97

14) 井之口235

15) 井之口237

16) 井之口59

17) 井之口164

18) 杉本91、白無垢は、「これは、結婚ということが、里方の家に死ぬことを意味するからでございます。また、下着に赤いものを着けますが、これは婚家に新しく誕生するという意味なのでございます。」(同趣旨368)。婚礼の行列が出たあと、「葬式の時と同じように、門口に塩をばらばらとま」(杉本92) くのも死ぬための白無垢(杉本335)と考えるからである。

たとえば「石津の民俗 一焼津市一」(平成5年静岡県史民俗調査報告集)によると、現在の黒い喪服と違い、昔は白い着物、白い帯だった。白い晒しを先だけ縫って三角帽子のようにしたものを野辺送りに被った。後ろへ垂らし、後ろ姿が見えないようにしたともいう(133)。白い鼻緒の藁草履を主な人たちは履いた(174)。「花沢の民俗」(平成14年)「浜当目の民俗」(平成15年)(共に焼津市史民俗調査報告書)でも同じである。

1892年10月頃と(不確かながら)推定されるヘンドリック宛でも白を黄泉の国と関連させて述べている。「先日長野で一人の政治家が腹黒い偽を語りましたので、その妻は丁度黄泉を旅する journey to the world of the ghosts 人がやるように全身白装束で all in white 美々しく飾り、神聖な儀式に従ってその唇を清め、かつ宝庫から祖先伝来の宝刀を取り出して来て見事に自殺しました。」

19) 杉本158

雪女はどこから来たか

いて、「当時武士の女として、離縁ということほどの不名誉はなかった」²⁰⁾、女は一方的に非とされ、離別されても、自分の生んだ子供を要求することも出来ない。子供は夫の家のもので²¹⁾、離縁された女は子らと生き別れになる。武家社会では男が女を弱者にする傾向が強かった²²⁾。

不遇のうちに命を落とし他界の存在となることがあった。「だれでも深い恨みをいだいて殺されると、その人の靈魂は、殺した人に仇を返すことができる」(「かけひき」)。「人が死のまぎわに願う、いつ消えることもない最後の復讐の念は、どんな墓をもみじんに砕き、どんな重い墓石をも引き裂く」(「死骸にまたがる男」)。このように、現世に何らかの執念を残して死んだ者は、他界に安住できず、現世にさまよい出る。それは恨みの念にあふれ仕返し、復讐しようとしたりする。このようにハーンは、これまでの作品では他界の存在となった者が危難を加えようとする相手には、それなりに難を受ける理由をつけ、うらみ、しかえし等のレベルで行動させていた。

しかしハーンは『怪談』では、「耳なし芳一」が示すように、他界の存在が直接関係がない人にも出現する状況を描く。雪の魔界を支配する者が、死の世界と生きている人間世界の重なり合う特別なところに迷い込んだ者を自分の本性から犠牲にする。

このような文脈に雪女を置いて見る。雪女は死者の霊ではあるが、「雪女は恨みをもってあらわれる死者の霊ではない」²³⁾ ということ、魔的な存在の雪女は特定条件での出現ではなく、一般条件のもとで構想されている。このように、これまでは見られない特殊から一般への変化傾向が『怪談』の世界で現れていることは、巳の吉を見る視点(後で触れる)も含めて注目すべき点である。

しかし雪女は「かわいそうになったsome pity for youお前はとっても年がゆかないからso youngかわいい pretty」という感情を示し、巳の吉を殺さない。なぜ雪女はそういう感情をいだくのか。時間のないはずの他界の存在である雪女に過去を推測できるということは、それがまだ時間的存在であり、空間だけの他界存在ではないことである。雪女は、前世で人間だったとき、何かの理由で生をまっとうできなかった。その特別な事情を忘れないままに人間界から他界に移り、無念の過去の意識があり、巳の吉にたいして既述の反応がある。これはすべて、日本文化の理解に基づいた作者の操作である。

20) 杉本105

21) 日本76

22) 宮田64

23) 牧野216

感情を持つこの雪女は、巳の吉に残してこざるをえなかった子を見、その子への愛情を思い出したのではないか。それを示唆するのは、雪女が巳の吉に話しかけ彼に pity を覚えた光景に、幼児を上からみつめる母の姿を重ねることができることである。雪女の先に引用した言葉に子を思う母の影が落ちていると思わせるのは、ハーンがいくつもの作品⁴⁾で同じモチーフを用いていることは先に言及したが、弟ジェームズ宛の手紙(1890年1月初旬推定)でも、自分らの母が揺籠のわが子に屈みこむ姿を「お前はあの黒くて綺麗な貌を覚えていないのか? 野生の鹿のような大きな茶色い眼が、お前の寝ていた揺籠の上からのぞきこんでいたはずだ」と述べているからである。作者は雪女を魔的亡霊の恐ろしい姿で出現させたものの、母性の属性を与え優しい言葉を口にさせずにはいられなかった。

5 日本人の一特性

吹雪の夜に茂作を凍死させたのは魔物である。作品主要部のかもし出す穏やかな雰囲気のために読者は、雪女が誰をも死に至らしめる魔力の存在であることを忘れがちである。これはどんなことがあっても約束を守ることを求め、それが破られたら厳しく迫って相手を殺すはずである。お雪が巳の吉に近づくためにわざと道で追い越されたと解したくなるのは、口外を禁じるという禁忌を課していたからである。

しかし、作者は、約束が守られているかを見張るために彼のもとへ来させただけでなく、お雪となって今一度、巳の吉と信頼と誠実の愛の生活を生きることを試みさせる(「お貞の話」と共通する)。死に際の姑の言葉、お雪が夜なべをしているときの穏やかな雰囲気が浮き彫りにする幸せな生活は、生き直された愛の結果である。お雪と一緒に過ごすこの充実が、彼に妻への全面的信頼を抱かせ、彼女の美しさが18才の時の体験を思い起こさせ、打ち明けさせる。

巳の吉は吹雪の夜に夢の中でのように美と出会い、魅せられていた。彼の胸に湧いた告白せずにはいられない突然の衝動が起こるとき、忘れっぽさという人間性が前提となっている。この結果、巳の吉は約束を破るが、破約の動機はヒューマンである。つまり、意図的に約束を破るのでなく、人間であれば誰にでもありがちな過失から彼は約束を破る。かくして、妻を失い、子らとともに取り残される彼は、その人間性が問題のある人物ではなく、弱さを持った男として描かれる。ハーンは、弱い人間があやまちを犯しても、これまでの厳しく断罪する姿勢(後出の「おしどり」を見よ)は見せず、相手を弱さを含めて大きく包み込み、受け止めている。

雪女はどこから来たか

平穏な暮らしの中で夫も子へも愛し大切にしてきたお雪が、突然、約束を破られ、悲しさに打ちのめされる。しかし彼女は別れて行かなければならない事態を静かに受け止め、耐え、別れる必然を了解していると解釈することもできるかもしれない。

巳の吉が破局を招くことを語り始めるときのお雪の落ち着きとその後の激しい怒りには、なんと大きな落差があることだろう²⁴⁾。お雪はこの危機的な状況にあっても冷静で、いつものように自然に振舞う。二人が向き合う姿を理解するには、ハーンが妻セツに認めていた「サムライの婦人」²⁵⁾の「完全無欠の自制心most perfect self control」²⁶⁾の反映を想定できる。

旧日本の家庭でのしつけは厳しかった。そのしつけは例えば言葉使いに顕著に現れ、また人前での感情表明をもしばった。目上の人の前で、自分の感情（悲しい気持ちや苦しい気持ち）を顔やしぐさに洩らすのは不謹慎だとされ²⁷⁾、「怒りや苦痛の心持は、どんなものでも、これを表にあらわしてはいけなばかりでなく、むしろ、その心持をもったときの顔と態度とは、かえってそれと反対の心持をあらわしていなければならないことになっていた。（…）莞爾としたえがおpleasant smileと、平然たる楽しいな声音soft happy tone of voiceとをもって、おのずから表さなければならなかった。（…）武家階級ではとくにこの動作のおきては、容赦なく励行されたものである。（…）いかなる場合にも、自然の感情を自然のままに外にあらわすことは、礼節を破るゆゆしい不謹慎だったのである」²⁸⁾。これは、ハーンが、旧日本の作法をわきまえた人々、特にセツらとの生活を基に観察し、認識した日本文化の一側面であったろう。そしてハーンは、このような節度を心得た古い生き方に驚嘆し、また賛嘆したのである。

我々はこのような心の持ち方の証言を、『武士の娘』²⁹⁾ではっきりと確認できる。「武士の娘は泣いてはならない」³⁰⁾、「武士のまつげはうるおうてはならない」³¹⁾、「日本人が過去幾代にもわたって、感情を強く表に表わすことは品を落し、威厳を損うも

24) 平穏で幸せな状態から、一挙に破局に向かわなければ緊張が先鋭にならない。作者が高まった緊張であるクライマックスに何かを続けることで、緊張効果を失う（アンティクライマックスに陥る）ことを避ける手法を取った例は、他にも（「富士の山」「むじな」など）見られる。

25) 日本174

26) 日本175

27) 日本175

28) 日本175

29) 杉本232

30) 杉本57

31) 杉本192

のだと教えられてきた」³²⁾、しかしまた「日本人は伝統の絆にしばられてその顔に仮面をかぶせ、唇をつぐみ、動作をはばまれて、その胸にあふれる愛情を表現する機会に恵まれていない」³³⁾。

ハーンが武士の血を引く人々のこのような自制心に既に注目していたことは、「赤い婚礼」(1894)の主人公およしが、思いもよらない縁談話を継母に言い渡されたときの反応が注意深い描写で描かれていることから知られる。最初は、とてつもなく不釣り合いな結婚相手を持ち出されて、およしは「死人のように真青になった。が、つぎの瞬間には顔を赤くし、微笑を浮かべてお辞儀したBut in another moment she blushed, smiled, bowed down, and…」³⁴⁾。作者はこれを二度も繰り返す。「彼女に保留せられて居た運命の宣告を聞いた後、最初は真青になり、次に真赤になったのは、お玉には全く推量も出来ぬ二様の情緒から起ったのである」³⁵⁾。「彼女は直ちに己が為すべきことを精確に自覚した—^{サムライ}武士の血がそれを教えた。そして時機を伺おうという目算を立てたのである。彼女は其時既に声を立てて笑おうとしたのをやっと制えつけた程の勝算があった」³⁶⁾。この笑いは「狂気を帯びている」³⁷⁾のではなく、武士階級の行動規範から生まれた余裕であろう。

巳の吉が語るうちに示される彼女についての認識の深まり、「あの女は人間ではない…夢だったのか、雪女だったのか」、この言葉でお雪は豹変する。翻訳では語順が変わるので、原文を示す。I was afraid of her, —very much afraid, —but she was so white! ... Indeed, I have never been sure whether it was a dream that I saw, or the Woman of the Snow."...

O-Yuki flung down her sewing, and arouse, and bowed above Minokichi where he sat, and shrieked into his face:--

特別な体験で出会った不思議さを示す大文字表記「白女The White Woman」から「雪女the Woman of the Snow」という他界の存在の認識を見せる。この言葉を聞いた途端にお雪は約束が破られたとし、豹変する。

巳の吉がその言葉を発したことがどういう意味を持つのかを、彼に思い巡らす余裕

32) 杉本232

33) 杉本277

34) Out of the East272。へるん13.25の「次にはえんだのは悪に立ち向かう勇氣と力が湧くのを感じたためであった」という解釈にたいしては、筆者には余裕の結果の現れに思える。

35) Out of the East273

36) Out of the East274

37) へるん34.60

雪女はどこから来たか

も与えずに、お雪は厳しく破約をとがめる。巳の吉と夕べの会話を穏やかに交わして、最も充実した時にあって、お雪が雪女に豹変することに関連させて、ハーンの妻であるセツの病的興奮を暗示した興味深い指摘がある³⁸⁾。筆者は、ハーンがセツとは限らず日本人にこのような特質を見ていたからこそ、雪女に優しさと恐ろしい側面を与えたと考えるが、その指摘はすでになされている³⁹⁾。「生と死の断片」(『東の国から』 V. (Out of the East 149) では、日本人のうちに原始的なものを、温和な日本女性の従順なやさしさの下に考えられないほどの冷酷さの可能性を見ている。自制と忍耐を持った男子のうちにも、決して赦すことを知らない、危険なものが心の奥底にあって何かの機会に奔出することを観察している。

「人は日本民族こそ自己抑制の最高の例証だと考えるでしょう。が、私はそうではないと確信しています。もし宗教的および社会的服従の必要性を取り除いたとしたら、日本人はいかなる自己抑制をも示さなくなるでしょう。なぜでしょうか？ 北方人種的な自己抑制には、大きな精神 large mindednessが必要とされるからです。・・・」(1894.2.12 チェンバレンン宛)。勿論、日本人自身もこのことを自覚している。「日本婦人の温順の中には、火山脈をしのばせているということは事実ですよ」⁴⁰⁾。作者が日本人のこの特殊で極端な面に強く印象づけられていたからこそ持ち出し、作品に取り入れたと考えてもいいのではないか。

6 激昂する女

雪女が正体を現す場面で原文は、感嘆符の連続(5回)が示すように絶叫であり、しかも非常に強調されている(ever, very very good)ので、訳文ではこの激しい勢いを幾らかも写し取らなければなるまい。

O-yuki flung down her sewing, and arose, and bowed above Minokichi where he sat, and shrieked into his face:—

It was I-I-I! Yuki it was! And I told you then that I would kill you if you ever said one word about it!... But for those children asleep there, I would kill you this moment! And now you had better take very, very good care of them;

38) ヘルン同箇所。作者が登場人物の女性の面影に妻を重ねていたという指摘を、「和解」の女性に関連して平川157は指摘する。

39) へるん20.15

40) 杉本247

for if ever they have reason to complain of you, I will treat you as you deserve!"...

Even as she screamed, her voice became thin, like a crying of wind;— then she melted into a bright white mist that spired to the roof-beams, and shuddered away through the smoke-hole... never again was she seen.

このお雪の絶叫は「おしどり」で尊允Sonjoを夢の中で、立て続けに発する疑問と非難の感嘆符つきで糾弾する女を思わせる。

なぜwhy、あなぜoh!why、あの人を殺したのです？

あの人に何のwhat罪があったというのです？

赤沼でわたくしたちは一緒にともしあわせだったのです。それなのにあなたはあのかつを殺してしまつたのですand you killed him!

一体あの人があつたをどんなwhatひどい目に会わせたというのですか？

あなたは御自分が何whatをしたか本当にわかつておいでですか？

どんな酷いwhat a cruel、どんなひどい事what a wicked thingをしでかしたかわかつておいでですか？

あなたはこのわたくしまでを殺したのです。わたくしは夫^{おっと}なしでは生きながらえることはできませんwithout my husband!……この事を申しにここへ参りました」

「雪女」の取り組み時期は「おしどり」とも重なっているので、この時期の作者の胸中で両作品は交流しあつても不思議ではない。そして雪女の絶叫は、「おしどり」で女の夫を思う気持ちと並べると、夫婦の強い結びつきを大切にすゝる心に基ついたものと解釈できる。

7 生きなおしたいという願ひ

巳の吉と雪女の間では交わされた約束を破ることは絶対的な悪であるとされている。「守られた約束」では、約束を守るだけのために切腹して幽冥界に行き、「破られた約束」では死者となつても破約の恨みをはらす。これらは昔話やメールヘンに見られる強く印象づけようとする道徳的要求と共通する。昔話では、一旦交わされた約束はその結果のいかに拘らず完全に遂行されねばならず、約束を守ることが根本的な道徳の規範であり、破ることは悪で卑劣であり、死以上のものである。

雪女はどこから来たか

このことは人間関係で必要なこともある妥協を知らない幼さ・素朴さとも解釈できるであろう。これは作者自身に由来するとともに、傍らにいた、信義を重んじる武士道に深く染まったセツの態度も影響したのではなかろうか。そして作者ハーン自身にそれを受け入れる面がなければ、セツの影響も限られたものでしかないだろう。

ハーン作品ではこれまでなら約束を破った結果、「お前を殺すよ」ですぐその恐ろしさ厳しさを実行するはずだった。「日本人はその感情を抑えて顔に出しません、その当の感情をぎりぎりまでつきつめた結果、最終的に起こる行動を抑止することはないのです」(1893.1.26 推定チェンバレン宛)という日本人観からすれば、破局的行動に至ったであろう。

しかしハーンはすでに1893年8月23日ヘンドリック宛で、純粹であることは摩擦を生じることを論じていて、複雑な現代社会ではそのような純粹な情緒は存在の場がなくなっていることを確認した。純粹に生きることを惜しみつつも現代社会の必然を受け入れた。作者は「雪女」に至って、約束を守ったかどうかの形式的な点にもうこだわらない。「雪女」が「おしどり」と違いを見せるのは、作品最後である。作者は子への愛、母の心を持ち込む。

約束を破られたうちは、お別れしなければなりません。子供たちをくれぐれも大事にしてやってください。もしもあなたが子供たちをそまつにしたり、つらく当たったりしたら、それ相応のお返しを私がいたしますよ。

破約の恨みよりもっと大事なものの一母子の愛情の形で倫理的価値を訴えた。雪女の絶叫と巳の吉に訴える叫びのコントラストは、作者の人間性の理解において一段と高まったことを示すものであるといえる。

ハーンは晩年に自伝的作品に取り組んでいた⁴¹⁾。「雪女」でも自己の出自を検討した側面があるのではないか。彼が、雪女、お雪、巳の吉の姿に投影した、父に棄てられた母、子と生き別れしなければならなかった母という伝記的事実を背景にしての思いは、日本人の他界、死者についての伝統的意識や先祖にたいする美しい思いに信服し、それを粹として用いて再び生きなおしてみたいという願いと交錯した。その時、美と恐怖というハーンの美学に、愛するものとの別れの必然の愛惜が加わって、いっ

41) 参照。拾遺集 I、196-7。「ひまわり」「私の守護天使」「夢魔の感觸」「ゴシックの恐怖」「亡霊」など。

そう豊穡で神秘的な文学空間が生まれたことは、読者がこの文学体験で感動することが証明している。

付記。本稿の一部は、本学部ヨーロッパ文化コース紹介誌「ヨーロッパ文化の扉」(2005.4発行)掲載の拙文「美しく冷たく、恐ろしくて優しい女」と重なります。

使用テキスト、引用・参考文献(カッコ内に示したのは略記)

Lafcadio Hearn:Kwaidan. ICG Muse,Inc. 2001.

Lafcadio Hearn:Japan An Attempt at Interpretation. ICG Muse,Inc. 2001「日本——一つの試論」平井呈一訳。恒文社。1986。(日本)

Lafcadio Hearn:The red bridal(in:Out of the East).Charles E.Tuttle.1996.

E.Bisland:THE LIFE AND LETTERS OF LAFCADIO HEARN in two volumes. HOUGHTON, MIFFLIN 1906.

E.Stevenson:The Grass Lark. A Study of Lafcadio Hearn.Transaction Publishers 1998. (Stevenson)

八雲会編集：小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集Ⅰ。雄松堂出版。1990。(拾遺集Ⅰ)

ラフカディオ・ハーン著作集全15巻。恒文社。1980～8。(著作集)

小泉節子・小泉一雄：小泉八雲「思い出の記」・父「八雲」を憶う。恒文社。1989。

赤田光男：祖霊信仰と他界観。人文書院。1986。(赤田)

大林太良：葬制の起源。中公文庫。1997。(大林)

井之口章次：日本の葬式。ちくま学芸文庫。2002。(井之口)

宮田登：都市空間の怪異。角川選書。平成13年。(宮田)

久野昭：日本人の他界観。吉川弘文館。1997。(久野)

杉本鉞子：武士の娘。大岩美代訳。ちくま文庫。1997。(杉本)

平川祐弘：小泉八雲とカミガミの世界。文藝春秋。1988。(平川)

牧野陽子：「雪女」——世紀末“宿命の女”の変容(平川祐弘編 小泉八雲 回想と研究 所収。講談社学術文庫。1992)。(牧野)

牧野陽子：『怪談』「耳なし芳一」について(國文學。學燈社1998年7月号)。(国文学)

ベンチョン・ユー：神々の猿—ラフカディオ・ハーンの芸術と思想—。恒文社。1992。(ユー)

八雲会(松江市)：へるん(号数と頁で示す)

小泉八雲顕彰会(焼津市)：八雲(同上)